

## 洋画と日本の風土

2018年4月17日(火)ー5月13日(日)

明治以来、常に西洋の新しい芸術思潮の影響のもとに発展を遂げてきた日本の洋画壇ですが、日本の風土と切り離したい性質の主題、表現を通して独自の画境に達した画家も少なくありません。洋画家らが向き合った日本風土の光と影を追いかけてみます。



《野と子供》 中川紀元 昭和7年(1932) 本館蔵(白川朋吉氏寄贈)

## ひやっかりょうらん 百花繚乱 日本の漆工

2018年4月17日(火)ー5月13日(日)

やわらかな陽射しのもと、かたく閉ざしていた植物の蕾は徐々にほころび、次々に開花しはじめる頃合いとなりました。今回の展示では、季節の花々や草木に身を包んだ漆工品



国宝《菊唐草蒔絵螺鈿手箱》 南北朝時代・14世紀  
和歌山・熊野速玉大社

を中心に紹介いたします。おだやかな春のひととき、草花の神秘的な生命力を感じつつ、気ぜわしい胸中や愁いに沈む気持ちを慰め、心なごやかに楽しんでください。

## 鉄：クロガネの美

2018年4月17日(火)ー5月13日(日)

鉄は錆びやすく取り扱いに注意を要しますが、鋭利で強靱な鉄製刃物は利器としてきわめて有用です。工芸品には安定した黒錆を人為的に生じさせた鉄が用いられたほか、赤錆により荒れた肌もまた好まれました。ここでは鉄を素材とする刀装具や茶釜を中心とする金工品をご紹介します。力強くも侘びたクロガネの美の世界をご堪能ください。



《鉄金象嵌 若竹文透彫鏝》  
江戸時代・17-18世紀 本館蔵(岸本真之助氏寄贈)

## 炎をまとう尊像 — 明王・天部 —

2018年5月15日(火)ー6月10日(日)



明王とは、煩惱に捉らわれて迷う人々を屈伏させ教化する、密教特有の尊像です。一般にその姿は、怒りの形相で手には武器を持ち、燃え盛る火炎に包まれたさまに表現されます。また仏教の護法神である天部のうち火天など、炎をまとう尊像についてご紹介致します。

《尊勝曼荼羅》 鎌倉ー南北朝時代・14世紀  
大阪・叡福寺

## 江戸禅僧の戯画

2018年5月15日(火)ー6月10日(日)



《布袋画賛》 仙厓義梵 江戸時代・19世紀  
大阪新美術館建設準備室

江戸時代の高僧たちは、大衆の教化を進める手段の一つとして数多くの書画を制作しました。なかでも駿河の白隠慧鶴(1685-1768)と博多の仙厓義梵(1750-1837)は、ともに臨済宗妙心寺派の僧で、個性的な禅画を数多く残しました。このたびの特別展に合わせ、大阪新美術館建設準備室所蔵品から、両者の「戯画」とも呼ぶべき楽しい作品を展示します。

## かんぼくろうこう 翰墨流香 — 清時代の書画

2018年5月15日(火)ー6月10日(日)

清は1912年に中華民国が成立するまで約270年続いた中国最後の王朝であり、その歴史とともに書画家は多彩な作品を生み出しました。本展では、清の最盛期といわれる康熙・乾隆朝から激動の清末に至るまでの書画を中心として展覧します。また、日本とかかわりの深い来舶清人の作品も特集します。



《藤花図(花卉図冊のうち)》  
張熊 清時代・咸豐元年(1851) 本館蔵